戦後学生運動・学園闘争叢書 2

復刻版

情況

第１次（1968年８月～1976年12月）全36巻

〔Ａ５判・上製・総約17,200頁〕

定価合本各巻19,800円（本体価格18,000円＋税10％）

揃定価712,800円（本体価格648,000円＋税10％）

＋別冊（解説・回想・総目次・索引）　分売可

（別冊は第２回配本で刊行）

別冊定価3,300円（本体価格3,000円＋税10％）

【全巻・別冊含む】ISBN 978-4-8350-8481-7
【別冊分売】ISBN 978-4-8350-8493-0

一九六〇～七〇年代の学生闘争・社会闘争の中心的役割を果たした雑誌『情況』、その〈知〉と〈運動〉の総合誌（メディア）をふたたび。

＊主要執筆陣＊

廣松渉・吉本隆明・秋山清・石牟礼道子
金達寿・武田泰淳・柄谷行人・海老坂武
最首悟・太田竜ほか

＊回想＊

古賀暹・菅原秀宣

＊解説＊

高橋順一

◎各氏推薦!!

菅孝行、最首悟、池田浩士、仲里効、
パトリシア・スタインホフ、松井隆志、白井聡、黒川伊織

不二出版

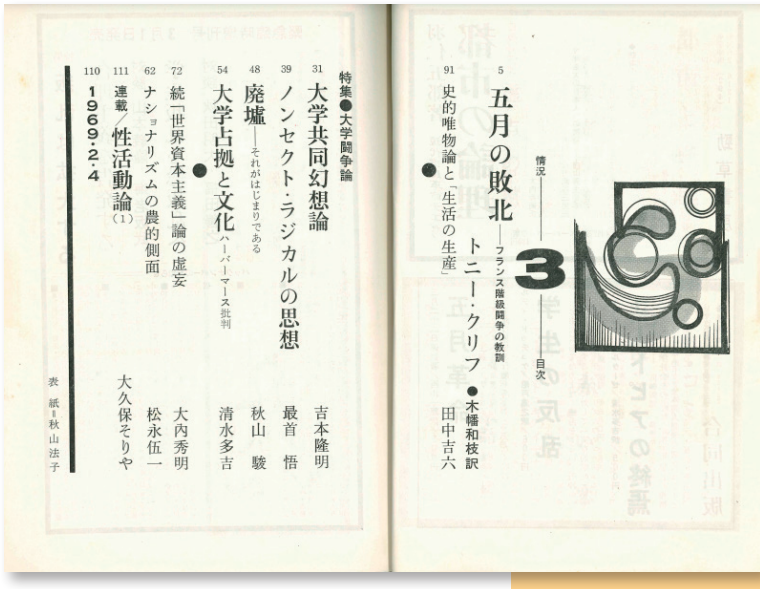
復刻の辞

一九六八年八月、新左翼系月刊誌『情況』が古賀暹によって創刊される。知識人と運動家との混成による多彩な執筆陣を抱えたその誌面には、全共闘運動ほか、砂川闘争・三里塚闘争・沖縄闘争・公害問題などの国内社会運動が特集され、さらに革命中国やソヴィエトなど世界史的視野も含めて〈一九六〇～七〇年代〉当時の社会運動の多面的広がりを反映させている。また、それら同時代の運動を土台に、天皇制・ナショナリズム・マルクス主義・法（警職法・旧優生保護法など）・女性・アイヌ・沖縄・朝鮮などを取り上げ、〝近代〟自体を問い直すメディアとして、運動・闘争の中心的役割を果たした。

敗戦後から一九六八年前後へかけての社会運動をめぐっては近年、とくにその運動の多面性から盛んに研究が進められている。最新研究の重要資料／史料のひとつとして本誌を復刻刊行する。

不二出版 編集部

東大正門の門柱右側に「帝大解体」、左側に「造反有理」と書かれていた。
『赤光』第57号（1969年１月25日）より



情況 3 目次

5 五月の敗北 ―フランス階級闘争の教訓 トニー・クリフ ●木幡和枝訳
91 史的唯物論と「生活の生産」 田中吉六 ●

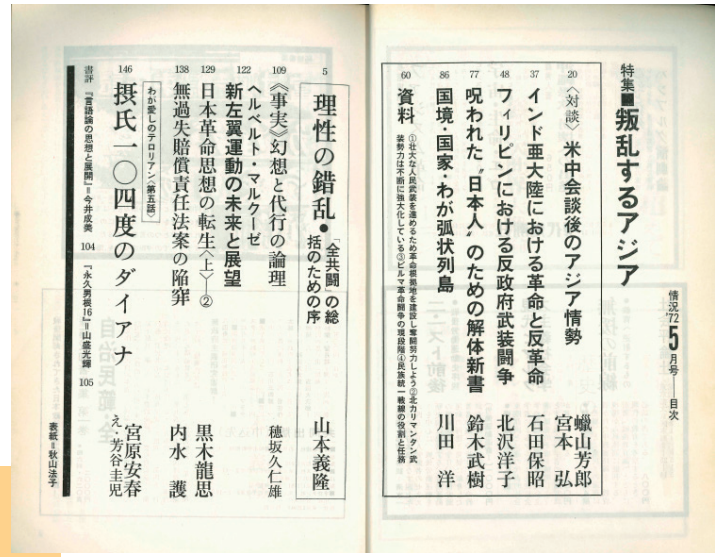
特集●大学闘争論
31 大学共同幻想論 吉本隆明
39 ノンセクト・ラジカルの思想 最首 悟
48 廃墟 ―それがはじまりである 秋山 駿
54 大学占拠と文化 ハーバーマス批判 清水多吉 ●
72 続「世界資本主義」論の虚妄 大内秀明
62 ナショナリズムの農的側面 松永伍一
111 連載／性活動論（1） 大久保そりや
110 1969・2・4

表紙＝秋山法子

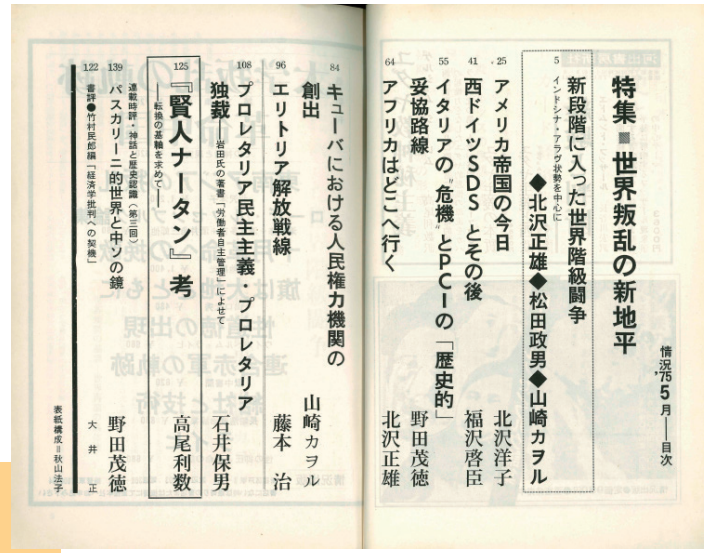
1969年３月号特集
「大学闘争論――東大闘争と大学」

内容見本

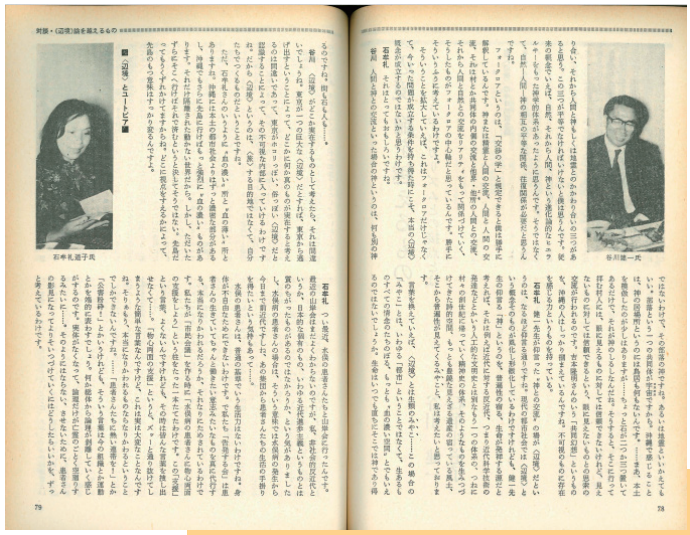
復刻版ではすべてモノクロの収録となります。



1972年５月号特集
「叛乱するアジア」



1975年５月号特集
「世界叛乱の新地平」



谷川健一・石牟礼道子「《辺境》論を超えるもの——ラディカリズムの接点とは」
（1971年６月号特集「《辺境》論を超えるもの」）

史料の声を聴け

菅 孝行（評論家・劇作家）

メディアが時代を画す社会変動を、半歩先んじて、その発端を作ることがある。しかし、そのメディアの刊行は現実の社会的政治的変動の萌芽に促されてのことかもしれない。どちらが先かは結局よく判らない。第一期『情況』と六〇年代の動乱はそういう関係の典型である。六六年に「三派全学連」が結成され、六七年には一〇・八の羽田闘争、六八年前半には佐世保・王子の闘争があった。

雑誌刊行の直前、古賀暹に誘われて小さなアパートでの発刊計画の会議に陪席したことがあった。会議では、これからの闘争の焦点は大学だと聞いた。もう日大全共闘の最初のデモのあった後なのだろうが、当時の私には、安保・ヴェトナム反戦と違って、大学闘争の意味がまだよく解らなかった。

創刊号は八月号として真夏に出た。秋には一〇・二一の新宿騒乱があった。一〇月号の誌面は成田空港反対闘争が、一一月号は大学叛乱が特集されている。誌上には全世界で同時に起きつつある叛乱に関する論文が幾つものった。廣松渉氏の資金提供と強い勧奨で刊行された経緯もあってか、マルクス主義哲学の先端的な研究論文も次々掲載された。

社会の激動が『情況』を育てた。同時に『情況』を読んだ学生が情勢を作った側面もある。六九年一月には安田講堂の攻防戦を迎える。闘争の渦の外側にいたのに、気づいてみるといつのまにか自分も筆者の末席を汚す当事者になっていた。〈時代〉を雑誌の誌面と並走しているような〈至福〉の感覚を味合わせてもらった。私にとって、この〈並走〉の感覚は激動の潮が引いても続いた。

近頃、史家が一九六八年闘争の史料を恣意的に曲解して殺してしまう事態が頻発している。これは出来事に後から立ち会う者の傲慢だ。遅れて生を受けた読み手には史料の声を聴きとる想像力と史料への謙虚さを求めたい。想像力で史料と〈並走〉してくれさえすれば、史料としての『情況』第一期を殺さずに、そこから多声的な交響を聴きとれる筈である。

「二流の雑誌」が歴史を変える

池田 浩士（京都大学名誉教授・ファシズム文化研究）

『情況』は、表紙にも目次にも奥付にもない「変革のための綜合誌」という自己規定を、背文字としてだけ持っていた。「状況」ではなくことさらに「情況」と名乗る誌名とともに、この自己規定が私個人は好きではなかった。号を重ねるにつれて「情況派」などという名称が市民権を得るようになった風潮も、同様だった。それにもかかわらず、のちに第一期と呼ばれるようになる一〇一号までの全冊を、増刊号も含めて私は定期購読しつづけた。この「二流の雑誌」こそは、同時代を体現し、歴史に介入していたからである。まさに二流でなければできないやりかたで。

その時代には、『展望』『世界』『思想の科学』など総合誌や思想誌がまだ大きな顔をしていたし、『人間として』『辺境』『知の考古学』などのユニークな雑誌も健闘していた。これらに伍しては、『情況』は「二流」としか言えないものだった。現に、その誌面に登場した論稿や作品で、いまなお生きた力を持続し得ているものは、微々たる例外を除けば存在しない。だが、もしもこの二流雑誌がなければ、歴史はまったく別のものになっていただろう。坂口安吾の小説『二流の人』がそれを物語っている。主人公の黒田如水（官兵衛）は、秀吉と家康の間でうまく立ち回るのが精一杯で、この両者のように歴史を変えるだけの力量はなかった。しかし、この人物が居なければ、秀吉も家康も別の道を歩んだだろう。二流の人こそが、じつは歴史を変えたのだ。二流の雑誌がどう歴史を変えたのか――それが、この復刻版によってこれから明らかにされる。

脱構築、そして情念の爆発

――『情況』創刊を取り巻く〝情況〟

最首 悟（和光大学名誉教授・思想家）

『情況』はいわゆる左翼の理論誌であるが、日本ではその左翼の一枚岩にひびが入って、新左翼が登場して十年、党派の妥協できない対立と、左翼からのドロップアウト、ノンポリと言われる学生たちの鬱屈のガス抜きなどが渦を巻き始めたさ中に発刊された。

欧米でも、米国の大義なきベトナム戦争に対する反対と、「理論」一般に対する脱構築の学生反乱の高揚があった。その刺激を受けた日本の大学闘争の特色と言えば、一九六九年来日したオギュスタン・ベルクがよく表している。――カルチェラタンでは脱構築論議がかしましいが、東京は脱構築そのものだ。ベルクの印象は東京の景観を見てのことであった。

日本で進行していたのは、家社会の脱構築であって、社会的には家長、学生反乱においては、教授の権威の失墜であった。東アジアの極東の政治・社会理論においては、構築の始まりというべき状況にあり、学生反乱は理念よりも情念の爆発であった。廣松渉による『情況』発刊は、そのような状況をふまえて、『状況』ではなく、『情況』とされたのである。

日本の学生反乱は新左翼諸党派の主導によるが、諸党派が同じ席に着くには無党派という接着剤が必要だった。全学共闘会議とはノンセクトを議長とする連絡調整機関であり、その典型は日大と東大である。私は東大全共闘に依拠した東大覆面助手共闘のスポークスマンであった。私の情想が『情況』に初めて載ったのは、七〇年四月号の反乱自衛官小西誠との対談である。

時の中の時と出会い直す

仲里 効（批評家）

雑誌とは横断する交通の場である、といったのはだれだったか？　一九六七年の第一次羽田闘争によって切り開かれたニューレフトの境位と大学制度の中に囲われた自己へ〈否〉の火を放った六八年の全共闘運動のはじまりに応接するように『情況』が創刊されたことは、〈横断する交通の場〉ということからすればけっして偶然ではなかった。

政治や社会や文化の領域を横断するように、戦後の枠組みを決定してきたマスターナラティヴが同時多発的にゆさぶられ、時代が捲られようとしていた叛乱の季節。ヴェトナム反戦や七〇年安保闘争とともにメルティングポットとなったのが〈沖縄〉だったが、その〈沖縄〉もまた新しい風を孕みつつあった。

川満信一が「転換期に立つ沖縄闘争――復帰のスローガンを捨てよ！」（六九年八月号）と告げ、松島朝義と谷川健一は「沖縄・国家を越える無限旋律」（七一年四月号）を聴き取り、同じ号に載った川田洋の「国境・国家・第三次琉球処分」は沖縄論を旋回させる画期を印した。川田はその前後の「新左翼運動と沖縄闘争」（七〇年六月号）や「国境・国家・わが弧状列島」（七二年五月号）で、沖縄をめぐる〈新〉なるものの設営を試みた。

こうした沖縄から、沖縄へと往還する言葉の風景は、日本国家の内と外の結界を出来させ、叛乱の季節の世界性をラディカルに問い糺した。状況のなかで、状況とともに鼓動を刻み続けた『情況』の復刻によって、時の中の時と出会い直すことになるだろう。〝かつて〟が〝いま〟に、〝いま〟が〝かつて〟に流れ込む、そんな開かれたメディウムである。

〈新左翼運動〉研究必携の資料／史料として

パトリシア・スタインホフ（ハワイ大学名誉教授）

〈六〇年安保〉は戦後日本の代表的な社会運動として有名である。一方、七〇年安保やその辺りの状況はそれ程よく知られていない。しかし、実は六〇年代の後半から七〇年代前半までの新左翼の社会運動はもっと複雑で、日本社会全体に対しての影響は遥かに深く長く続いた。その後の長い間、多くの日本人は社会運動を怖がって子供にもその恐怖を伝えた。最近になって若い世代の学者や学生らが当時の新左翼運動に関心を寄せているが、あの時代は今日とは信じられないくらい異なっている。体験が無くてどうやってあの時代の雰囲気を把握できるのだろうか。その意味で、今日その経験をもたない者たちはこの雑誌『情況』を手に取らなければならない。

一九六八年八月から一九七六年一二月まで全三六巻一〇一冊が刊行された雑誌『情況』の実際のページをめくれば、刻々と変貌していく社会運動のその〈生の状況〉が具に伝わる。新聞やテレビのような説明なしの報告と異なり、評論家や活動家がその目的や意味を緻密に分析している。例えば、ハワイ大学「高沢文庫」が所蔵する三三冊の『情況』のなかには、「ゲリラと武装闘争」、「国家原罪としての天皇制」、「世界革命の思想――ゲリラと都市暴動」、「大学闘争論――東大闘争と大学」、「市民社会と階級形成」、「政治・暴力・革命」、「近代科学技術の宿命」、「国家の起源と言語・文化」、「新左翼労働戦線」、「刑法改悪と警察国家」といった特集タイトルを目にすることができる。より広範な視野から、戦後日本の新左翼（運動）の全体を把握するには、復刻版雑誌『情況』は極めて貴重な資料・史料となる。

一九六〇―七〇年代運動史のさらなる深化に向けて

松井 隆志（武蔵大学社会学部准教授・『社会運動史研究』（新曜社刊）共編者）

一九六〇年代末から七〇年代にかけての学生運動や「新左翼」運動などの運動世界を再検討しようとするならば、第一期『情況』は重要である。たとえば、全共闘運動の当事者の声は、『朝日ジャーナル』などと並び、『情況』を通して社会に投じられていた。またフランクフルト学派の紹介や廣松渉のマルクス研究など、同誌で当時先端的な社会思想が論じられてもいた。全潮流ではないにせよ、この時代の「（新）左翼」に一定の影響力を持ち、その意識を代弁する雑誌だったと言えよう。

しかしその重要性にもかかわらず、大学図書館でも全冊揃って所蔵できている館はほぼない。これは発行元が「老舗」ではなく、運動の渦の中から創設された独立系出版社だったからだろうか。さらに、古本としてまとめて売りに出されることも、（少なくとも近年では）稀にしかない。つまり、閲覧不可能ではないにせよ、残念ながらどこでも気軽にアクセスできる雑誌ではなかった。

その第一期『情況』が、このたび復刻される。前述の点で、大変意義深いことだ。私を含め、当時を体験していない世代による一九六〇―七〇年代の運動史の本格的探究は、始まったばかりだ。もちろん、その時代を当事者として生きた人々も含め、この『情況』復刻は、改めて当時の諸運動の意義と教訓を明らかにするための、貴重な基礎資料を提供してくれることだろう。一社会運動史研究者として、積極的な所蔵を呼びかけたい。

もうひとつの《一九六八年》のために

白井　聡（京都精華大学専任講師）

『情況』は《一九六八年》の雑誌である。

私はまだ生まれてもいない《一九六八年》――この曖昧な革命が今日の世界をつくり出した。《一九六八年》は、性の解放、両性の平等、近代主義批判、西洋中心主義批判、ロゴス中心主義批判、マイノリティの承認等々への不可逆的な進路を開いたとされる。そうした評価が世に喧しいのを聞くと、「そんなものかな」と思う。

確かに、ＢＬＭ、ＭｅＴｏｏ運動、レインボー・プライド等々、今日世界で同時進行的に広がっている異議申し立て、社会構造の変革を訴える運動の歴史的起源は《一九六八年》に求められうるだろう。その意味で、《一九六八年》は、今日の時代精神の核心に位置している。

しかし、だとすれば、資本主義の新たな延命手段そのものであるＳＤＧｓ、そして官僚主義や先例踏襲主義を批判して個人の創意を祭り上げたネオリベラリズムもまた、《一九六八年》の申し子なのだ。むしろ、《一九六八年》のこの側面、ネオリベラリズムとの親和性こそ、今日の時代精神の核心をなすものと見るべきかもしれない。五月革命に揺れるソルボンヌの壁に書かれた「禁止することを禁止する」は、まさに「ターボ資本主義」のモットー（「商品化にタブーはない！」）になったのだから。

してみれば、体制に対する、あらゆる権威や権力に対する異議申し立てとして始まったはずの《一九六八年》は、いつの間にか「体制の思想」と化したのだろうか。良きにつけ悪しきにつけ《一九六八年》はポストモダニズムの起源であり、公の場にＴシャツで現れるＩＴ長者から「歴史の事実は解釈次第であって、結局人は自分の信じたい物語を信じるしかない」との前提に立つ歴史修正主義に至るまで、どれもこれもが《一九六八年》の産物なのだとすれば。《一九六八年》をそのように位置づける言説は、近年ますます増えている。

そんないま、『情況』第一期が復刊される。《一九六八年》の後に生まれ、「体制化した《一九六八年》」の帰結ばかりを見せつけられている世代にとって、それは「もうひとつの《一九六八年》」を見せつけ、「あり得たかもしれない現在」を夢見させる。そしてその夢が広がり、全世界を獲得するとき、「到来しなければならない未来」の起源となる。私はそう期待している。

「トロツキスト」の声を聴け

黒川　伊織（神戸大学・協力研究員）

一九五六年のスターリン批判・ハンガリー事件を契機として、ソ連共産党の指導する国際共産主義運動は、その正統性／正当性を失墜した。ソ連共産党が革命の輸出から平和的共存へと路線を転換するなか、日本共産党も急速に議会主義政党化していった。

このような変化を、革命の放棄と捉える人々がいた。革命を裏切ったとみなされた「旧左翼」に対して、「反帝国主義・反スターリニズム・世界革命」を掲げる「新左翼」が形成されたのは、このような文脈においてである。

「新左翼」は、内部に対立を抱えつつも、かつての「前衛」＝日本共産党に反発する若者の支持を集めて六〇年安保闘争の最前線に立ち、一度は退潮したものの、一九六七年一〇月八日の羽田・弁天橋での惨劇以後再び運動の表舞台に躍り出て、「旧左翼」側からは「トロツキスト」と罵倒されながら、「一九六八年」における運動の世界的高揚に身を投じていった。

一九六八年八月に創刊された第一期『情況』は、このような時代状況のなかから生み出された当事者によるメディアである。「旧左翼」の裏切った革命を引き受け、マルクス主義の思想と運動を鍛え直そうとした人々の声が、本誌には運動の現場から拾い上げられている。「新左翼」の思想と運動がようやく歴史化の対象となりつつあるいま、その可能性と限界を検証するための不可欠の資料として、本誌の復刻を喜びたい。

復刻版第１次『情況』配本概要

全36巻＋別冊１

揃定価 712,800円（税込）

ISBN 978-4-8350-8481-7

Ａ５判上製・総約17,200頁

配本	復刻版巻数	原本通巻号数	原本発行年月	刊行・価格・ISBN
第１回配本	第１巻	創刊号～３号	1968年８月～10月	2021年12月刊行 79,200円（税込） 978-4-8350-8482-4
	第２巻	４号～６号	1968年11月～1969年２月	
	第３巻	７号～９号	1969年３月～４月	
	第４巻	10号～12号	1969年５月～７月	
第２回配本	第５巻	13号～15号	1969年８月～11月	2022年２月刊行 79,200円（税込） 978-4-8350-8487-9
	第６巻	16号～18号	1969年12月～1970年３月	
	第７巻	19号～21号	1970年４月～６月	
	第８巻	22号～24号	1970年７月～９月	
	別冊	解説・回想・総目次・索引＜分売定価3,300円(税込)＞		
第３回配本	第９巻	25号～27号	1970年10月～12月	2022年５月刊行 79,200円（税込） 978-4-8350-8494-7
	第10巻	28号～30号	1971年１月～３月	
	第11巻	31号・32号	1971年４月・５月	
	第12巻	33号～35号	1971年５月～７月	
第４回配本	第13巻	36号～38号	1971年８月～10月	2022年８月刊行 79,200円（税込） 978-4-8350-8499-2
	第14巻	39号～41号	1971年10月～12月	
	第15巻	42号～44号	1972年１月～３月	
	第16巻	45号～47号	1972年４月～６月	
第５回配本	第17巻	48号～50号	1972年７月～９月	2022年11月刊行 79,200円（税込） 978-4-8350-8504-3
	第18巻	51号～53号	1972年10月～12月	
	第19巻	54号～56号	1973年１月～３月	
	第20巻	57号・58号	1973年４月・５月	
第６回配本	第21巻	59号～61号	1973年６月～８月	2023年２月刊行 79,200円（税込） 978-4-8350-8509-8
	第22巻	62号～64号	1973年９月～12月	
	第23巻	65号～67号	1974年１月～３月	
	第24巻	68号～70号	1974年４月～６月	
第７回配本	第25巻	71号～73号	1974年７月～９月	2023年５月刊行 79,200円（税込） 978-4-8350-8514-2
	第26巻	74号・75号	1974年10月	
	第27巻	76号～78号	1974年11月～1975年２月	
	第28巻	79号・80号	1975年３月・４月	
第８回配本	第29巻	81号～83号	1975年５月～６月	2023年８月刊行 79,200円（税込） 978-4-8350-8519-7
	第30巻	84号～86号	1975年７月～９月	
	第31巻	87号～89号	1975年10月～11月	
	第32巻	90号～92号	1975年12月～1976年２月	
第９回配本	第33巻	93号～95号	1976年３月～５月	2023年11月刊行 79,200円（税込） 978-4-8350-8524-1
	第34巻	96号～98号	1976年６月～８月	
	第35巻	99号・100号	1976年９月・11月	
	第36巻	101号	1976年12月	

【表紙および上写真】『情況』69年７月号特集「大学を告発する」口絵グラビアより

関連書籍のご案内

戦後学生運動・学園闘争叢書１〈復刻版〉『赤光』全３巻・別冊１

◎体裁＝Ｂ５／Ａ３判・上製・総1,170ページ　◎揃定価58,300円（税込）　ISBN 978-4-8350-8430-5

別冊＝総目次・索引（分売可）Ｂ５判・並製・150ページ　定価2,200円（税込）　ISBN 978-4-8350-8435-0

不二出版
〒112-0005
東京都文京区水道2-10-10
TEL 03-5981-6704
FAX 03-5981-6705
振替 00160-2-94084

＊税10%

各配本分売可
（各巻分売応相談）